

総目次

2019年(第1号～第7号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

英文論文と査読

(企画:『看護研究』編集室)

[インタビュー] 英文査読の現状と展望——Japan Journal of Nursing Science (JJNS) 編集事務局の立場から、田中久仁美。(1) 10-17.

Overview of Responding to Review Comments. William L. Holzemer. (1) 18-27.

英文査読のプロセスの実際。石原逸子。(1) 28-37.

英文誌Nursing and Health Sciencesの発行を通して得られること。野垣宏, Teresa E. Stone, 前田純子, 村上京子, 伊東美佐江, 安達圭一郎, 徳田信子, Rosanna McMaster. (1) 38-43.

第2号

よい質的研究論文を 発表するために

セミナー「How to Peer Review and Publish
Qualitative Papers」より

(企画: 萱間真美)

研究者、査読者、編集委員、編集委員長のためのセミナー開催の意図——よい質的研究論文を発表するために。萱間真美。(2) 88-91.

Peer Review of Qualitative Research——Promoting Publication of Relevant, Trustworthy and Useful Research. Christine A. Tanner. (2) 92-103.

質的研究のピアレビューの方法をどのように開発したらよいのか。Ian Shaw (編集 木下康仁)。(2) 104-108.

質的研究論文の査読基準作成と評価類型・改善方向の試案。木下康仁。(2) 109-119.

セミナーにおける質疑応答。Christine A. Tanner, Ian Shaw, 木下康仁, 萱間真美。(2) 120-124.

第3号

Dr. Patricia A. Gradyを迎えて 看護研究者としての成長と キャリアパスを考える

(企画:『看護研究』編集室)

Growth and Career Path as Nursing Researchers: What Kind of Researcher Do You Want to Be? 看護研究者としての成長とキャリアパスを考える——あなたはどのような研究者になりたいか?。Patricia A. Grady/監訳: 戸部浩美, 真田弘美。(3) 182-192.

Career Development as a Young Nurse Scientist 博士号を取ったばかりの駆け出し看護学研究者が米国でポスドク生活を始めた一例。後藤大地。(コメンテーター) Patricia A. Grady, 真田弘美。(3) 193-201.

[パネルディスカッション] 若手研究者としてのさらなる成長をめざして。(パネリスト) 西村ユミ, 長谷川直人, 丸尾智実, 後藤大地。(ファシリテーター) 山本則子。(コメンテーター) Patricia A. Grady, 鎌倉やよい, 真田弘美。(3) 202-210.

第4号(増刊号)

臨床実践を研究につなげる

(企画:『看護研究』編集室)

特集1 「ケアの意味を見つめる事例研究」 に臨床の現場で取り組む

「ケアの意味を見つめる事例研究」を臨床看護研究の中で行なうことの意義① 院内の共同研究者・教育担当者の立場から。長尾祥子。(4) 244-247.

「ケアの意味を見つめる事例研究」を臨床看護研究の中で行なうことの意義② 外部の共同研究者・支援者の立場から。深堀浩樹。(4) 248-253.

[事例研究の実際] 安静指示のある脊椎疾患患者に提供された「あうんの呼吸」による看護——安静保持が難しい患者の事例から。花田美里, 赤井畑明里, 長尾祥子, 廣山奈津子, 瀬戸菜月, 深堀浩樹。(4) 254-263.

[インタビュー] 実際に取り組んだ現場の看護師の経験1。赤井畑明里。(4) 264-268.

[インタビュー] 実際に取り組んだ現場の看護師の経験2。花田美里, 長尾祥子。(4) 269-273.

[コメント] 「ケアの意味を見つめる事例研究」開発者の視点から。山本則子, 野口麻衣子。(4) 274-275.

特集2 臨床研究の視点

臨床研究への誘い。藤雄木亨真, 道端伸明, 麻生将太郎。(4) 282-288.

[『看護研究』誌公開収録セミナー] 臨床の素朴な疑問から、研究で使えるリサーチクエスションを立ち上げよう。森田光治良/廣瀬直紀。(4) 289-305.

第5号

その研究を世界へ

国際学会で発表しよう 2

(企画:上別府圭子)

大学院生の国際学会発表を促進するために——指導教員としての経験が浅い時期の試行錯誤を振り返って. 深堀浩樹. (5) 330-336.

複数の国際学会発表から学んだ発表準備と英語学習の方法. 小玉淑巨. (5) 337-343.

東京女子医科大学における国際学会発表の取り組み. 小川久貴子. (5) 344-346.

初めての国際学会発表を通して感じたこと・学んだこと. 室矢明日香. (5) 347-350.

収穫のある国際学会発表のために. 武村雪絵. (5) 351-357.

国際学会発表の経験を修士論文に活かす——質的研究における分析切り口の試行錯誤から学会発表に至るまで. 高橋好江. (5) 358-362.

新たな研究の萌芽となる国際学会発表——聖路加国際大学における経験. 堀内成子. (5) 363-369.

EAFONS2019におけるポスター発表から得たもの. 穴戸恵理. (5) 370-376.

第6号

実践と結びついた看護理論をつくる

状況特定理論をヒントに

(企画:坂下玲子)

[1. 実践の知を看護理論へと導くために——状況特定理論の構築から考える]

1-1 状況特定理論とは何か. (編集・執筆) 濱上亜希子/Eun-Ok Im. (6) 414-420.

1-2 状況特定理論の構築の実際——AIMS理論を例として. (編集・執筆) 渡邊里香/Eun-Ok Im. (6) 421-427.

1-3 状況特定理論をめぐる質疑応答. (編集・執筆) 中西永子/Eun-Ok Im, 坂下玲子. (6) 428-433.

1-4 多様な状況特定理論の構築例. 栗村健司. (6) 434-445.

1-5 状況特定理論をめぐる動向. 坂下玲子, 小野博史. (6) 446-455.

[2. 実践の現象を捉えるために——「できごとリフレクション」から考える]

2-1 ケアの価値を考える「できごとリフレクション」. 小野博史. (6) 456-466.

2-2 現象を捉える「できごとリフレクション」の実際. 中西永子, 小野博史. (6) 467-473.

実践と結びついた看護理論をつくるために. 坂下玲子. (6) 474-482.

第7号

拡がる看護研究の未来

(企画:川口孝泰)

看護系学術分野の拡がりと今後の展望. 川口孝泰. (7) 498-501.

[これからの看護研究のために——主要学協議会の取り組みから]

日本看護系大学協議会の取り組み. 上泉和子. (7) 502-504.

日本学術会議および日本看護系学会協議会の取り組み. 小松浩子. (7) 505-508.

日本看護研究学会の取り組み. 宮腰由紀子. (7) 509-511.

[看護研究の歩みと展開]

疫学研究を軸にした自身の足跡からわが国の看護研究の方向性を考える. 牧本清子. (7) 512-520.

現象学的研究の「根幹」と未来. 西村ユミ. (7) 521-529.

現象学的看護研究の導入と新たな展開. 村上優子, 西村ユミ. (7) 530-535.

[対談] 看護研究の展開への期待と展望. 真田弘美, 川口孝泰. (7) 536-549.

特別記事

communion (交感) という概念の可能性——看護実践の暗黙知を明らかにする試み. 山下裕紀. (1) 48-58.

PICUに子どもが入室した両親の担った役割 第3報 場のモニタリング. 戈木クレイグヒル滋子, 西名諒平, 岩田真幸, 村山有利子, 西川菜央, 清水称喜, 渡井恵, 森智史, 佐藤貴之, 増田真也, 中田諭, 辻尾有利子, Ardith Z. Doorenbos. (1) 62-75.

ハゲタカジャーナルに気をつけろ!?. 西垣昌和. (2) 140-148.

PICUに子どもが入室した両親の担った役割 第4報 子どもの頑張りを支える. 戈木クレイグヒル滋子, 西名諒平, 岩田真幸, 村山有利子, 西川菜央, 清水称喜, 渡井恵, 森智史, 佐藤貴之, 増田真也, 中田諭, 辻尾有利子, Ardith Z. Doorenbos. (2) 150-165.

KOMIケア理論とその創出に至る歩み——日本発信の看護理論の構築をめざして. 金井一薫. (3) 226-234.

「手」を用いる看護技術の重要性を改めて問う——女性の下肢の「むくみ」と用手リンパドレナージの効果に関する研究を通して. 中尾富士子, 樋口有紀, 小濱京子. (4) 308-311.

「転用可能性(transferability)」再考——「ケアの意味を見つめる事例研究」のために(前編). 家高洋. (4) 312-318.

「転用可能性(transferability)」再考——「ケアの意味を見つめる事例研究」のために(後編). 家高洋. (5) 390-397.

[特集関連] 共著者ネットワーク分析を用いた看護研究の動向分析. 今井哲郎, 川口孝泰. (7) 554-567.

SCOPE

わが師 Dr. Margaret A. Newman を偲んで、遠藤恵美子、(2) 166-169.

ヨーロッパにおける異文化看護分野の研究動向—European Transcultural Nursing Association に参加して、齋藤真希、(5) 398-403.

連載

集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン

4 研究の軌跡が、奇跡と奇蹟をもたらす!?. 大久保暢子、(1) 1-5.

5 私の研究の原点と「ご縁」、丸尾智実、(2) 79-83.

6 患者さんとの出会いが研究活動の原動力に、坂井志織、(3) 173-177.

7 実践者としての研究者をめざして、深谷基裕、(5) 321-325.

8 教員生活10年間のTrajectory、水田明子、(6) 405-409.

9 教育・研究の20年を振り返る、水野恵理子、(7) 489-493.

インタビューデータ分析の質向上のための NVivo 活用術

1 NVivoの概要とデータを取り込む作業まで、萱間真美、(2) 128-138.

2 発言者別のデータからカテゴリを生成する、萱間真美、(3) 216-224.

3 概念間の関連の分析を深めてコアカテゴリをつくる、萱間真美／(コラム) 杉浦寛奈、(5) 380-388.

書評

『在宅医療カレッジ——地域共生社会を支える多職種の学び21講』——当事者の言葉が拓く在宅医療の新たな地平、坂下玲子、(2) 149.